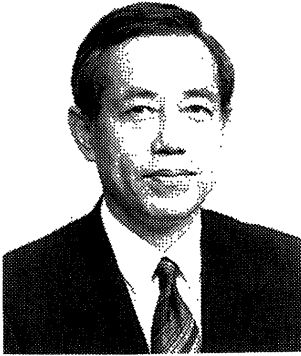


## 会長就任に当たって



杉 田 愼 東北大学

Y. Sugita, Tohoku University

このたび、日本応用磁気学会の第11代会長に就任することになり、その重責に身の引き締まる思いがいたします。

本学会は、1977年（昭和52年）に日本学術振興会第137委員会を母体にして発足して以来、順調に発展し、今日の隆盛を迎えたことは誠に喜ばしいことです。これもひとえに会員の皆様が、本学会を「自分達の学会」として大きく育てようと、長年にわたり努力されたお陰であると思います。また、理学と工学の壁や、民間企業・国公立研究所・大学の壁を取り払って協力されたことが、大きくプラスしました。これは、学会創立当時の指導的立場にあった先輩の方々の姿勢でして、以来、現在まで20年もの長い間、脈々と引き継がれて来ました。

本学会の発展のベースには、当然のことながら、応用磁気学そのものの進展があります。垂直記録や薄膜ヘッド・MRヘッド、Co系スパッタディスクなどを中心とした磁気記録、Tb-Fe系アモルファス膜を用いた光磁気記録、ガーネット単結晶膜を用いた磁気バブルメモリ（前半10年）などの情報記録デバイス・材料、アモルファスやナノ結晶ソフト磁性材料、NdFeBやSmFeNなどの永久磁石材料、巨大磁気抵抗多層磁性膜やグラニューラー磁性膜、マイクロ磁気素子やスイッチング電源、アモルファス磁気センサ、生体磁気等々、多くの興味深いテーマの進展が本学会を極めて活気溢れる場にいたしました。

しかし最近3～4年の学会の状況に目を向けますと、本学会の発展にも、やや陰りが見え始めたように思われます。その一つのあらわれが、会員や賛助会員の数が増加しないまたは減少気味であることです。学会は大きいほど良いわけでは決してありません。しかし学会の健全な運営と活動のためには、常に適度な成長が必要です。

これに対しては、すでに原田前々会長と対馬前会長の下で、種々の施策がなされています。特筆すべきことは、今年になって実現した学会誌の毎月発行です。これは、質の高いオリジナル論文をできるだけ多く、本学会誌に投稿していただくために非常に重要なことです。また、解説やトピックス紹介の論文も充実したものが多くなりました。このような学会誌の充実、編集理事を中心にして多くの会員の方々がボランティア活動に尽力されているお陰で実現したものであり、関係の方々に心から感謝いたします。私も引き続き学会誌の質の向上、特にオリジナル論文の質と数の向上を、関係の方々と協力して進めたいと思っています。学会誌をいっそう面白く、有用なものにすることが、本学会の発展に役立つ主要な策の一つと信じています。これに関係して、学会誌の英文化によるサーキュレーション向上も、まじめに議論すべき時期が来たと考え、そのための第一歩を踏み出したいと思っています。

学会の活力向上のために種々の提案がなされ、一部実行されています。磁性の基礎や理論の分野の一部を取り込むこと、本学会の柱ともいえる磁気記録や光磁気記録に密接に関係した非磁性分野の研究を取り込むこと、デバイスと物理の境界領域の研究に力を入れること、磁性と超伝導の境界領域の研究を開拓すること等々です。これらは最近の研究会や専門研究会のテーマなどに積極的に反映されています。このような努力により、本学会の活動分野は少しずつ広がりをみせていますが、効果が表にあらわれるのには、まだ相当に長い時間がかかるかと思います。私も引き続き関係の方々と共同して、新分野の開拓に努めたいと思います。

学会の活力を向上させる方策の一つとして、専門研究会の活用を強調したいと思いま

す。現在、マイクロ磁区、磁性多層膜の新しい機能、超伝導マグネティックス、光スピニクスの四つの専門研究会があり、各々独自の運営をしています。専門研究会によって多少の違いはあると思いますが、全般的に活発な議論に適した場であるといえます。前に述べましたように、本学会の特長である理学や工学の専門の枠を越えた、あるいは企業や大学といった所属機関の枠を越えた活動が、このような場を利用して十分にやれると思います。これにより会員の皆様が、研究者・技術者としての自分の力を一段と向上させることができれば、学会の活性化の有力な策の一つになるのではないかと考えます。今後、新しい専門研究会の積極的な提案も含めて、専門研究会を活用していただきたいと思います。

学会の活性化にも密接に関係する重要な課題に、「国際化」があります。ちょうど10年前に、Intermag '87が本学会主催で東京で開催されました。岩崎組織委員長の下で数年にわたる用意周到な準備と的確な企画がなされた結果、大成功の内に大会議が運営されました。これは国際社会への大きな貢献として高く評価され、本学会のステータスを著しく高めました。同時にこれは本学会の活力とレベルの向上に大変役に立ったと思います。以後、垂直磁気記録国際会議 (PMRC)、光磁気記録国際シンポジウム (MORIS)、磁性材料物理国際シンポジウム (ISPM) が本学会主催あるいは共催で定期的に関われ、国際的に高い評価を受けています。今年から来年にかけて、PMRC '97 (1997年10月20～23日、秋田市)、Joint MORIS/ISOM '97 (1997年10月27～31日、山形市)、ISPM '98 (1998年8月23～26日、仙台市) が開かれます。また、Intermag Conference が、京都 (1972年)、東京 (1987年) に引き続き、12年ぶりにアジアにやって来ます。すなわち1999年5月にSeoulで韓国磁気学会が主催して開かれることが決定されています。組織委員長の姜先生からは、プログラム編成の面で本学会の全面的協力を要請されています。私は、アジアで開かれる3回目のSeoul Intermagを成功させるために、プログラム面での協力を理事の方々と相談して早急に決め、強力に進めたいと思います。また会員の皆様には、できるだけ多くの方がレベルの高い論文をもって、これに参加していただくようお願いいたします。韓国、中国、台湾、シンガポールなどアジアの国々で、応用磁気の研究が一段と活発になっている今日、Seoul Intermagを契機に、相互の結びつきを強めることは、お互いにメリットが大きいと思われます。本学会としても、アジアの国々からの新会員の加入があれば、活力向上の点で歓迎すべきことと考えます。前に述べた学会誌の英文化は、実はこのようなアジア諸国との交流にも関係してくるのです。

以上、本学会の21年目のスタートに当たり、いくつかの抱負を述べました。当然何をやるにせよ、人とお金、時間の制約があります。これらの制約の下で、会員の皆様、理事・評議員の方々の英知を結集して、本学会の前進のために、微力ながら全力を尽すつもりです。本学会を中心にして、独創的でインパクトのある新しい成果が、一つでも二つでも今後生み出されることが、私の会長としての願いです。よろしく皆様の御支援・御協力を賜りますようお願いして、会長就任のあいさつとさせていただきます。

## 略 歴

昭35 東京大学理学部物理学科卒業

昭35～60 日立製作所中央研究所 主任研究員 (昭46)、主管研究員 (昭55)

昭60～平3 同日立研究所 主管研究長 (昭63)、技師長 (平2)

平3～平9 同中央研究所 技師長

平9～ 東北大学電気通信研究所教授

昭61 大河内記念技術賞、平7 日本応用磁気学会賞

専門分野 磁性薄膜、磁性メモリ、磁性物理 (理博)